

令和6年度 糸魚川市中学生広島派遣研修の概要

1 目的

唯一の核被爆国の国民として、被爆の恐ろしさ、苦しみを伝えるとともに、次代を担う子どもたちの未来のために、平和で豊かな暮らしを認識することを目的とする。

2 派遣先

広島市

3 派遣期間

令和6年8月5日（月）～7日（水） 2泊3日

4 参加生徒

No.	氏名	ふりがな	性別	学校名
1	井伊智紀	い い ともき	男	能生中学校
2	塚田琉央	つかだ りゅう	男	
3	田代湊都	たしろ みなと	男	糸魚川東中学校
4	野本咲翔	のもと さきと	男	
5	熊木萌々	くまき もも	女	糸魚川中学校
6	猪又鼓	いのまた つづみ	男	
7	杉澤結人	すぎさわ ゆいと	男	
8	金子智成	かねこ ともなり	男	
9	古田壮志	ふるた そうし	男	
10	岩崎考良	いわさき たから	男	青海中学校
11	大塚健太郎	おおつか けんたろう	男	

5 引率職員

No.	所属	職名	氏名
1	こども教育課	指導主事	山下 太郎
2	こども課	主査	野本 彩希
3	総務課	主事	齋藤 直紀

6 実施経過

5月末	参加生徒、担当教諭の選出
6月 11 日 (火)	担当教諭打合せ会
7月 18 日 (木)	事前学習会
7月 19 日 (金) ～8月 2 日 (金)	各中学校で作成した千羽鶴を市役所本庁舎 市民ホールに展示
8月 5 日 (月) ～7日 (水)	広島現地研修
8月 29 日 (木)	研修報告会
2学期以降	各学校での研修報告会

7 広島現地研修スケジュール

－ 1 日 目 － 8 月 5 日 (月)

時 刻	行 程
6 : 20	出発式 (糸魚川駅自由通路)
6 : 48	糸魚川駅 発
12 : 27	広島駅 着
14 : 15～15 : 50	平和記念公園見学 (千羽鶴献納)
16 : 00～17 : 00	被爆体験講話聴講
18 : 50	旅館 着

－ 2 日 目 － 8 月 6 日 (火)

時 刻	行 程
7 : 10	旅館 発
7 : 50～ 8 : 50	平和記念式典参列
11 : 20～12 : 50	呉市 大和ミュージアム見学
15 : 10～16 : 45	旅館 着 とうろう流しメッセージ作成

研修の概要

18：55～19：50	とうろう流し参加
20：00	旅館 着

－ 3 日 目 － 8 月 7 日 (水)

時 刻	行 程
8：00	旅館 発
8：20～ 9：30	平和記念資料館見学
10：10～10：30	原爆ドーム見学
12：12	広島駅 発
17：43	糸魚川駅 着
17：50	帰還式（ジオパル）

広島派遣研修を振り返って

能生中学校 2年1組 井伊 智紀

自分が広島派遣で最初にしたのは平和記念公園での千羽鶴の献納です。平和祈念式典の前日ということもあって、かなりの人が来ていました。千羽鶴もたくさん納められていて、これだけの人が広島の原爆に関心を持って来ていることを実感しました。その次には被爆者の遺族の方の話を聞きました。その話の中でも特に印象が大きかったものの一つが原爆が落ちた時に発生した熱風で表面が焼けて、泡のように表面がふくらみ、変色した屋根瓦です。復興が進んだ後にも残り、高校生の教材としても使われていたと聞いて、再び原爆の恐ろしさについて学ぶことができました。

二日目の8月6日には、平和記念公園で行われる平和記念式典に参列しました。そこでは広島市長や市議会議長、遺族代表、こども代表などの平和を願い、それに向かうための宣言を聞いて、その内容にある問い合わせなどには、深く共感しました。

その後に大和ミュージアムのある呉市まで電車で向かい、到着するまでにも巨大な港や、運搬用のクレーンなどを見ることができました。大和ミュージアムでは最初に呉の攻めづらく、守りやすい地形などから軍事施設がおかれるようになったことや、戦艦「大和」がどのように使われたのかなどを解説していました。その後に館内見学をし、「大和」の模型や、乗組員の遺品なども展示されていました。その中でも特に特攻兵器「回天」は、それ自体の残虐さ、それを使った人の家族に向けたメッセージはとても悲痛なものでした。その他

にも当時使われていた爆弾などもあり、戦争のスケールに、改めて驚かされました。それを見て、国民が貧しくなるほどの資金を使い、数えることもできないほどの命を失くしても、得られるものは何もない戦争の無意味さを感じました。

そして次に夜に行うとうろう流しのためのメッセージの作成をしました。日中に行った記念式典と大和ミュージアムで学んだおかげで、より真剣に、増えた知識でメッセージを書くことができました。自分が書いたのは「戦争を始めるのは人間、でも傷ついたり悲しんだりするのも同じ人間だ。」というようなもので、普段よりよく考えることができたと思います。そしてとうろうを元安川に流し、平和への祈りを捧げました。段々と暗くなる中、ゆらゆらと川を流れたくさんのとうろうは、その一つ一つに感情に關わらず様々な人の平和への祈りや願いがこもっていることをとても強く感じられました。

最終日には、平和記念公園にある平和記念資料館の見学をしました。平和記念資料館には、原子爆弾と広島に関する資料が多く展示されていました。原爆が落ちたところの絵なので悲惨なものはばかりあるけれど、それも戦争の悲しさを知る重要なものなので、どんなに悲惨で残酷なものだったとしても、しっかり見て、知ることがとても重要だと感じました。

広島派遣研修を振り返って

能生中学校 2年2組 塚田 琉央

今回、被爆地ヒロシマに行って、改めて「平和」とは何か、そしてどうすれば「平和」になるのかを考えることができました。

1日目の被爆体験講話では、被爆二世の講師の多賀さんが「私たちは原爆が投下されたとき、生まれていないけど、被爆者の方たちの経験を伝えていくことが大切である。」と何度もおっしゃられており、被爆者の高齢化が進んで、当時の光景を知る人も少なくなっていると知りました。だから、あの時のヒロシマを僕たちが次代へ伝えていくことが大切だと思いました。

2日目の平和記念式典にはさまざまな国の人人がいました。世界平和は日本だけでは達成することはできないと思います。世界平和のためには世界中の人们が、戦争の恐ろしさを知り、平和の尊さを感じることが大事だと思います。こども代表の平和への誓いにあった「ヒロシマを共に学び、感じましょう。」という言葉にとても共感しました。その後、呉市の大和ミュージアムに行きました。戦時中の呉市のことや戦艦「大和」の構造、スケールの大きさを知ることができました。その中でも人間魚雷に搭乗した人の、家族に送る音声メッセージはとても胸が苦しくなりました。夜のとうろう流しには「平和をつくる」などと書いて流しました。たくさんのカラフルなとうろうは感動的でした。

そして僕が一番心に残った3日目です。まず平和記念資料館に行きました。原爆投下前の家がたくさんあるヒロシマの写真、隣には原爆投下後の同じ場所からの写真があり、家は1軒もなくなっていました。その他にも、8時15分で止

まっている時計や原爆の熱線の影響で座っていた人のかたちが残っている階段など衝撃のものばかりでした。この日原爆ドームを間近で見ました。これまで写真や映像で何度も見たことがありましたが、実際目の前にすると外観だけではなく、中にも瓦礫が散乱していると分かりました。これもとても衝撃的でした。

僕は今回の広島派遣研修を通して「平和」は自分が行動しないとできないと思いました。多賀さんも紹介されていた「平和は言うことではなく、行うこと。」この言葉のように、自分たちが平和のためにできることを考え、行動していくたいと思います。

そして二度とこのような悲惨なことがないように、これからも楽しく暮らせるように、平和の大切さを伝え、繋げていきたいです。

過去を学び、未来へつなぐために

糸魚川東中学校 2年 田代 湊都

僕は8月5日から7日までの三日間、広島派遣研修に参加しました。参加した動機は原爆の恐ろしさを知り、改めて平和の大切さを学ぼうと思ったからです。

僕は三日間の研修を通して特に印象に残っていることが3つあります。1つ目は大和ミュージアムでの見学です。そこには戦艦ヤマトを10分の1サイズで再現した模型が展示されていました。特に心に残っているのは水中で人が乗り、目標に体当たりする特攻兵器、いわゆる人間魚雷です。そこで僕は魚雷で敵艦に向かっていく方が、家族への感謝の気持ちを残したメッセージを聞きました。今でも残るその音声を聞いた僕はその方の気持ちを思い、とても胸が苦しくなりました。「二度と同じことをしてはいけない。大切な人の命をなくしてはいけない。」と強く感じました。

2つ目は広島平和記念資料館です。平和記念資料館では、実際に被爆して亡くなられた方のボロボロになった学生服や、原爆が投下された8時15分で止まっている時計などがあり、改めて原爆の恐ろしさを感じました。資料館の展示物を見ていると、今自分が生きていることがどんなに幸せかということを実感しました。

3つ目は平和記念式典に参列したことです。平和記念式典では、日本の方々だけではなく、外国の方もたくさんいて、二度と戦争してはいけないという気持ちが伝わってきました。平和への思いを述べた小学生の子供代表は「願うだけでは平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和を作っていくのは私た

ちです。」と話していて、この言葉に僕の思いは変わりました。家族や友達など周りの人たちに戦争や原爆の恐ろしさを伝えていくことが大切で、それが今の僕にできることだと思いました。

世界では今も戦争をしている国があり、たくさんの人の命がなくなっています。自分の国ではないからといって他人事にしてはいけません。日本は唯一の核被爆国です。同じ過ちを繰り返してはいけないと強く思いました。今回の広島派遣研修に参加したことにより、原爆の恐ろしさや戦争を二度と繰り返してはいけないということ、平和の中で勉強できるということがとても幸せなだと感じました。世界が平和であるために、この経験をみんなに伝えていきたいです。

広島派遣研修で学んだこと

糸魚川東中学校 2年 野本 咲翔

今回の広島派遣で学んだことは原爆の恐ろしさです。いろいろなところに行ったり、いろいろな人の話をきいたりして、もう絶対に戦争を起こしてはいけないと思いました。また、糸魚川市内の中学2年生と一緒に行ったことで仲間も増え、楽しく学習することもできました。

1日目に被爆者体験講話を聞いて、実際にどういうことが起きたのかをより詳しく知りました。講話をくださった多賀さんは戦後に生まれた方ですが、平和への願いを込めて広島で講話の活動をしているそうです。そこでは被害や被爆者の家族のことを知ることができました。また、この講話では今まで知らなかつたことを知ることができ、その後の二日間の研修がとても分かりやすいものになりました。

2日目は平和記念式典に参加しました。そして被爆者の方々に黙とうを捧げました。その後、大和ミュージアムに行きました。大和ミュージアムでは大和のことについて学んだり、呉の歴史を学習したりしました。ここでは戦艦大和の技術にも驚きましたが、何より大和戦死者の名前が刻まれている碑を見て僕は心が痛くなりました。また、戦争にどんなものが使われたのかも知ることができました。2日目の最後はとうろう流しをしました。とうろうに願いを込めて多くの方々が参加していました。綺麗なとうろうの流れる様子を見ながら、それぞれの人の思いが叶って欲しいと思いました。

3日目は平和記念資料館を見学しました。ここには戦争で亡くなってしまった方の私物や苦しんでいる様子の写真が飾られていました。僕はそれを見て、また心が苦しくなりました。他にも原爆が落とされたときの写真も見てその凄まじさに驚きました。外国の方もたくさんいて、いろいろな人に戦争の恐ろしさが伝わってくれるといいなと思いました。そして最後に原爆ドームの見学に

行きました。写真で見たことはあったけど、実際に見るとより原爆の恐ろしさを実感しました。

この三日間で戦争の恐ろしさをたくさん学ぶことができました。そして今回の広島派遣で「戦争は絶対に起こしてはいけない。」ということをいろんな人に教えたいと感じました。また、これをきっかけにして自分自身でも戦争のこと、原爆のことを調べようと思いました。この研修は貴重な経験でした。糸魚川東中学校の全校生徒に伝えたいです。

研修を通して伝えたいこと

糸魚川中学校 2年1組 熊木 萌々

私は広島派遣研修に参加して、原爆や戦争についてたくさんのことを見聞きし、学んできました。参加前は、学校の授業で戦争について学んではいましたが、あまり実感がないのが正直なところでした。

平和記念公園には、数多くの千羽鶴があり、海外からたくさん的人が訪れていて、「平和」は世界共通の願いなのだと感じました。

被爆者講話では、当時の様子を詳しく教えていただきました。約3,000度～4,000度にも及ぶ熱線で、人間の皮膚や当時の広島の日常を一瞬で焼き尽くしたそうです。また、爆心地から600m以内にあった屋根の瓦が、高温の熱線にさらされて泡立ち、ざらざらになったものを実際に触らせてもらいましたが、その時、私ははっとし、ようやく原爆の恐ろしさについて実感が湧いてきました。あんなに硬い瓦をも溶かすほどの熱線が、人の皮膚に当たり、ドロドロに溶けた様子を想像し、とても苦しく、胸が押しつぶされそうになりました。

ある被爆者の方のお話で、当時の広島は地獄だったとありました。まちにあふれていたたくさんの笑顔を、たった一発の原爆によってすべてを灰色の世界へと変えてしまったこと、助けを求める声と絶望の涙でまちが埋め尽くされたこと、まさに地獄のようです。平和は願うだけでは訪れず、自分たちの日常を守るためにも、私たちの手で平和を作らなければならない、という言葉があり、私は胸がとても熱くなりました。

大和ミュージアムでは、戦死された方々の言葉に触れてきました。特攻隊員た

ちの家族に向けた手紙や遺書、音声などたくさんの物がありました。ある特攻隊員の遺書には、『お国のために、我が命を捧げられることを嬉しく思う。』とありました。今では考えられないほど雑に扱われていた命。ただの消費物としてしか考えられていなかった一人一人の命。好き好んで戦争している人は誰もいなかったはずです。行きたくない、死にたくない、大切な人と普通の生活がしたい…、本当は誰もがそう思っていたことでしょう。でもお国が決めたことに逆らうことが許されるはずもありません。どんな思いで戦闘機に乗り、敵軍へと向かって行ったのでしょう。とても辛い状況下に置かれていた隊員の方々の思いが、ひしひしと伝わってきました。

わたしたちは、当時被害を受けていないから関係ない、生まれていなかったから知らない、でよいのでしょうか。原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さから目を背けてはいけません。まずは戦争について一つでも多くのことを知り、日本が、世界が、このような悲惨なことを二度と繰り返さないよう、私は学校の報告会などを通してたくさんの人たちに伝えていき、平和について一緒に考えていきたいです。

広島派遣

糸魚川中学校 2年2組 猪又 鼓

僕が今回の広島派遣を通して学んだのは、「原爆の恐ろしさ」です。

まずは、被爆者の講話です。講話をしてくれた多賀さんは実際に被爆した人が段々減っていく中話してくれました。多賀さんは講話中に原爆による熱線で表だけ焼けた瓦を見せてくれました。その瓦は熱線で表面が黒光りに焼けており見たときはどれだけひどく熱かったかがよく伝わりました。

次に原爆の恐ろしさを知ったのは、平和記念資料館です。資料館に展示してあったものは原爆の恐ろしさ、歴史が分かりました。その資料館の中の絵で一番印象に残ったのは、水を求めて手を挙げて顔も、口も、鼻も、無い状態で歩いている絵です。その絵に加えて、水を求めて消防用の水に上半身や全身浸かってそのなかで亡くなっていた絵もあって胸が締め付けられる感覚がしました。そして展示品で一番印象に残ったのは、薄黒い跡の残った建築物の一部を切り取った展示品です。その展示品を見て最初は「どんな展示品なのだろう」と思い、その展示品の説明を読んでみたら見る目がかわりました。個人的には、一番原爆の恐ろしさが伝わりました。原爆の落下地点の周辺にいたのか、そのまま爆発に巻き込まれ、何も残らず残ったのは跡だけで痛みを感じる間もなく亡くなってしまったと思われます。こんなにも簡単に消し飛んでしまうとすると原爆の恐ろしさをより感じることができました。資料館の最後に亡くなった被爆者たちが火葬された後の沢山の骸骨の写真があり原爆でどれだけの人が亡くなったのか

を改めて実感しました。

これから中学校で生徒の皆さんに発表の機会があるので、今回の広島派遣を通して学んだことを中学校の皆さんに伝えていきたいと思います。

広島派遣事業レポート

糸魚川中学校 2年3組 杉澤 結人

私が広島派遣研修に参加した理由は、小学校6年生のときに見た「はだしのゲン」で原爆について知り、そのことに強い関心を持ったからです。この広島派遣研修は、平和や広島の歴史について学ぶ良い機会だと思い、参加しました。

私が広島で学んだことは3つあります。

まず1つ目は、被爆二世である多賀さんによる被爆体験講話です。多賀さんは直接被爆していませんが、「原爆被爆を語り継ぐ会」のメンバーとして、ピースボランティアガイドを務めていて、私たち中学生に原爆のことを伝える活動をされています。原爆投下から今年で79年が経ち、実際に被爆した方たちからお話を聞くことが難しくなった今、多賀さんのようにご家族が被爆された方のお話を聞けることはなかなかないので今回お聞きしたことを周りの人、下の世代の人に伝えているようにしたいと思いました。また実際に溶けてザラザラになった瓦を触らせてもらい、当時の恐怖を肌で感じることができました。

2つ目は、とうろう流しです。私は「世界平和」と「核兵器がなくなってほしい」という願いを書きました。このとうろう流しで、原爆で亡くなった方々に私の思いが届いてほしいと願いました。真っ暗な中で光り輝きながら川を流れるとうろうには、多くの人々の思いが込められていて、それを見ている時間

はとても神秘的でした。また、多くの外国人も参加していて、外国語で書かれたとうろうも多く見かけました。広島のことは日本だけでなく、世界中に認知されているということが分かりました。

3つ目は、平和記念資料館での見学です。まず、被爆前の広島の写真を見た後、焼け野原になった広島の写真を目にした瞬間、胸が締めつけられる思いがしました。美しい街並みが一瞬にして破壊され、多くの命が奪われたことを考えると、言葉にできない悲しみと衝撃を受けました。

暗い空間の中で見たボロボロの服や焼け焦げた三輪車など目をそむけたくなるような物もあり、当時の原爆の恐ろしさがまるでその場にいるかのようにリアルに伝わってきました。当時何の罪もない広島の人たちがこんな犠牲を負ったことを私たちは知っておく必要があると思いました。

この体験を通して、私たちは二度と同じあやまちを繰り返さないよう、平和を守るための努力をおこたってはいけないと強く思いました。また、戦争の恐怖を次の世代に伝え、平和な未来を築くために何ができるかを考え続けることが大切だと学びました。まだ広島に行ったことがない人は、ぜひ自分の目で確かめてみて欲しいと思いました。

広島派遣レポート

糸魚川中学校 2年4組 金子 智成

私がこの派遣事業を通じて最も戦争の恐ろしさを実感したのは、被爆者講話と平和記念資料館の見学の二つの体験でした。

まず、最初の体験は「被爆者講話」でした。講話をしてくださいましたのは、多賀俊介さんという被爆二世の方でした。多賀さんは「原爆被爆を語り継ぐ会」のメンバーとして活動していて、被爆の記憶を次の世代に伝えるための重要な役割を果たしています。彼のお話の中で特に印象に残ったのは、「日本は世界で唯一の被爆国であり、この語り継ぐ会を絶対に残していきたい」という強い意志が込められた言葉でした。そして、多賀さんは「実際に被爆した人々の数が年々減少している中で、特に若い世代に対して、もっと関心を持ってほしい」と話していました。

講話の中で、熱線で表面がブツブツになった瓦を見せて、彼の家族が体験した恐怖や苦しみを交えて話を進めていただきました。特に心に残ったのは「実際に原爆の爆発を体験することはできないけれど、被爆した物に触れたり、被爆者の感情を読み取ったりして、自分自身で感じることが大切だ」という言葉でした。例えば、鉄さえも溶かしてしまうほどの熱線を自分が受けたとしたら、一体どうなってしまうのか。その熱線によって皮膚が剥がれ落ち、内臓が飛び出してくるということは、どれだけの苦痛なのか。多賀さんのお話を通じて、私はこれまで考えたことのないような多くのことを、深く考えることができました。

二つ目の体験は、平和記念資料館の見学でした。この資料館では、被爆者がそ

の時に見た光景を描いた絵や、遺品がたくさん展示されていました。遺品のそばには、その持ち主がどんなことを感じ、どのような思いを抱いていたのかが書かれており、その言葉の一つ一つが遺品と重なり合って、これまでに感じたことのない複雑な気持ちになりました。

資料館の展示の中で特に印象に残ったのは、爆発の瞬間である 8 時 15 分で止まった懐中時計や、被爆で真っ黒に焼け焦げた子供の三輪車などでした。これらの物は、ただの展示物ではなく、当時の人々の生活やその瞬間の悲劇を象徴していました。これらの展示品を見るたびに、戦争の悲惨さや、何の罪もない人々が一瞬にして命を奪われたということを改めて強く感じることができました。

日々、化学やコンピューターなどは進化し、日常の便利なものとして浸透しています。一方その進化で、より強力な兵器を作ることができるでしょう。決してそうならないように、世界中の人々が戦争に反対する心を持たないといけません。では今、自分にできることを考えてみると、今回感じた戦争の恐ろしさを少しでも周りの人に伝えていくことだと思います。

広島派遣研修で学んだこと

糸魚川中学校 2年5組 古田 壮志

僕は広島派遣研修の3日間を通してとても大切なことを学びました。

1日目は被爆体験講話があり多賀俊介さんという被爆2世の方からお話を聞いていただきました。多賀さんは実際には被爆にはあっておらず本当の恐怖はわからないと言っていました。ですが、被爆にあった人たちに話を聞いているうちにこのままで終わらせてはいけないと原爆投下当時のことなどをたくさん学び今でもたくさんの人達に講話しているそうです。実際に被爆した本人たちは高齢化が進み当時の様子を語れる人も減少傾向にあるということも聞きました。そこで多賀さんが最後におっしゃっていた言葉です。

「伝えていく、そして繰り返さない、繰り返させない」です。この言葉を聞き僕も伝えることの大切さを覚えました。

2日目は平和記念式典に参列しました。そこにはたくさんの学生や外国人も参列していました。平和記念式典では広島市長をはじめとし岸田首相などの人達が平和について語り核の削減、平和への誓いを述べていました。最後の平和への誓いでは子供代表が「願うだけでは、平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和を作っていくのは私たちです」と平和を固く誓っていました。

式典が終わり次に大和ミュージアムに行きました。そこには戦争当時に特攻部隊である人たちが家族に残した音声や手紙が残されていました。そこに残されていたものには「日本のために」と残されたもののが多かったです。そこで僕は特攻とは無慈悲なものだと感じました。夜には、とうろう流しを行いました。と

うろう流しにもたくさんの人達が参加していました。そして川を流れるうろうにはひとりひとりの平和への願いが書いてありましたその景色はとても神秘的でした。

最終日には平和祈念資料館に行きました。資料館は、3日間で行った平和記念公園などの場所とは雰囲気、その場の空気感が違いました。平和記念資料館では当時の様子を「地獄」とあらわした文や、様子を残した絵や写真がたくさんありましたその中には原爆投下前の路面電車の通るにぎやかで鮮やかなとても綺麗な街並みがありました。そして次には原爆投下後の写真がありました。「たった1発」その1発でにぎやかだった街が一瞬にして吹き飛ばされました。建物は崩壊し、草木は枯れ焼け野原のような状態でした。他にも被爆当時のままの時間で止まった時計など当時の悲惨さを物語るものがたくさんありました。

最後に僕が感じたことは今ここにある平和、日々幸せに暮らしている「今」は「当たり前ではない」と研修を通して感じました。

「愛国心」だけでなく、「愛地球心」で創る世界

青海中学校 2年1組 岩崎 考良

1. はじめに

私は、8月5日から7日にかけて広島派遣研修に参加してきました。

私は、テレビでロシアとウクライナの戦争を見て戦争の本当の恐ろしさとは何だろう、戦争はどうして起こるのだろうと思い、参加しました。

2. 多賀さんの講話

まず、1日目に原爆被害者2世の多賀俊介さんのお話を聞きました。多賀さんは、原爆が広島に落ちた5年後に生まれました。多賀さんが生まれた時の広島は、原爆が落ちた跡が残っていて、電車に乗っていると手にやけどを負っている人や、片足がなくて道で「お金をください」と言っている人もいたそうです。多賀さんは幼い頃は、戦争に対して興味がなかったそうですが、多賀さんのおばさんの足にガラスが刺さっていることを知り、戦争に対して怖いと思い、大人になって広島県原爆被害者団体協議会に入ったそうです。

私が今回、多賀さんの講話で最も心に残ったことは、ある外国人が言った「平和は言うことではない、創ることだ」という言葉です。次の世代を築くのは私達なので、「戦争のない平和な世の中」を創っていけるようにしたいです。

3. 平和記念式典

2日目は、平和記念式典に参列しました。私は代表の小学生の「願うだけでは平和は訪れません。」という言葉に心を打たれました。世界中のたくさん的人が

平和を願っています。しかし、実行しなければ、意味がありません。生きたくても生きられない人、明日を共に過ごすはずだった人を 79 年前と同じように失ってはいけません。世界中の人が多様性を認め合い、相手の考えを良さと捉えることが大切です。

また、原爆被害者は当時のことを語ろうとしなかったということに、私は最初驚きました。自分が経験したことを話せばいいのに、なぜ話をしないのだろうと思いました。しかし、自分にとって嫌なことを話すのは簡単ではないと思いました。それほど原爆は恐ろしいものだと思いました。それでも、原爆の恐ろしさを後世に伝えて、戦争を絶対に起こさないようにしたいです。怖いことも勇気をもって行動できるようにしたいです。

4. 戦争の兵器を見て感じたこと

その後は、大和ミュージアムに行きました。戦艦大和を見た時、最初はかっこいいと思いました。しかし、よく考えると、戦艦大和のようなものが作られるから戦争はなくならないのだと思います。戦争をなくすためには、戦争で使われる道具をなくす必要があります。また、原子爆弾が落ちてすぐに亡くなる人だけでなく、何年か経ってから放射能の影響で亡くなった人もいました。私は後から亡くなることを止めることのできない時限爆弾のように感じ、恐怖を感じました。このことから、世界にある戦争に使われる兵器をなくせるように訴えていきたいです。

5. 最後に

今回の広島派遣で、戦争の恐ろしさについて詳しく学ぶことができました。原爆が落ちたのはそれまで戦争を続けてしまった日本人にも良くないところがあ

ります。そして、平和を創るのは私達です。私達の行動で次の時代がどうなるか決まります。愛国心を持ち過ぎて行動してしまうと、戦争にもつながります。そのため、愛地球心を持って行動することを心掛けたいです。平和を次の時代につなげられるように頑張ります。

平和を作るために自分が出来ること

青海中学校 2年2組 大塚 健太郎

現在、地球上では数多くの戦争、紛争が起こっている。ロシア・ウクライナ戦争やシリア内戦、イスラエルやパレスチナ近辺で起きている武力衝突など、どれも戦闘が泥沼化し、非常に多くの犠牲者を出している。しかし、日本では多くの人が戦争について深く考えていないのではないだろうか。8月6日は広島に原子爆弾が投下された日だ。このような時だからこそ戦争と平和について学びたいと思い、今回の研修に参加了。

研修を体験して身近な人に伝えたいと感じたことが三つある。

一つ目は、被爆者と被害者の違いだ。研修で講話をしてくれた多賀俊介さんは家族が原爆を体験した。多賀さんは「わたしは原爆を体験していないので被爆者ではないですが、原爆の被害者です」と語った。被爆者はだんだん高齢化し原爆の恐ろしさを伝えることが出来なくなっている。自分たちひとりひとりが原爆を伝えていかなければならぬと強く感じた。

二つ目は、知ることは平和への第一歩ということだ。平和記念資料館を見学すると当時の生々しい写真や実際に被爆した衣服などが沢山あった。正直目をそむけたくなったが、そこで学んだことや初めて知ったことは少なくなかった。その時、平和の大切さをただ説くだけでなく実際に戦争を調べたり、被害にあった場所を訪れたりすることが平和をつくっていくのだとわかった。生々しいものは苦手だ、つらい、見たくないという意見もあるかもしれない。だが実際に学んでみると「怖い」「つらい」という気持ちから「このような悲劇を二度と繰り返

してはならない」に変わり、誰かに伝えたくなる。そして平和がつくられていくのだと自分は信じている。

三つ目はこれから平和をつくっていくのはわたしたちだということだ。戦争を体験した人はだんだん少なくなってきてている。自分たちが行動し、伝えていかなければ、平和をつくることが困難になり、核戦争の危険が高まってしまうかもしれない。そうならないようにはまずは広島で研修を終えた自分から身近な友達に発信していきたい。

広島派遣こと業ではたくさんの学び、発見があった。今回研修に行った時間が無駄にならないように、また、平和への道が途切れないように今回体験したことを見家族や友達に伝え、地域全体で平和をつくっていきたい。

糸魚川市平和都市宣言

糸魚川市は、新潟県の最西端に位置し、日本海や北アルプスの山々などの自然資源とヒスイ文化をはじめとした歴史や伝統文化を有しています。この豊かな自然と歴史の織り成す地に生活する私たちは、この郷土を大切に守り、市民のいきいきとした活動と交流がもたらす活力のある美しいまちを築き、戦争のない平和で豊かな暮らしがいつまでも続くよう念願しています。

しかし、今なお世界各地では、戦争によってかけがえのない多くの命が失われています。

私たちは、唯一の核被爆国の中として、被爆の恐ろしさ、苦しみを伝えていく役割を担っています。また、次代を担う子どもたちの未来のために、平和で豊かな暮らしを伝えていかなければなりません。

糸魚川市は、市民とともに平和と安全を求める誓いを新たにし、核兵器の廃絶と戦争のない真の恒久平和を願い、ここに平和都市を宣言します。

平成19年6月28日

糸魚川市